

「平和に暮らしたいだけ」



中村 哲

8

この報告をアフガニスタンの山中から送ります。

九月二十二日、ついに沖縄ピースクリニックの開所を行った。二〇〇二年五月着工以来一年四カ月である。開所式前に、日本から訪問を希望する者も少なからず、大きなセシモノーを期待する向きもあった。

前日に突然、開所式を住民に通告して行ったのは訳があった。アフガニスタンの現状が日本にあまりに知られていなかったのだ。診療所のあるクナール州は現在米軍の活動が最も活発な地域で、米軍はもちろん、国連や外国NGO(非政府組織)も狙われるようになって、「復興支援」は完全に停止していた。路上に外国人集



団とおぼしき者がおれば、米軍傘下の組織にとられ、ゲリラ組織の格好の標的になる。住民にとつても、外国人が死ぬば大きなニュースとなり、迷惑である。

この事情はなかなか分かってもらえないが、これ以上延期すれば信頼にかかわるし、そろそろと観光団とどられかねない報道陣を連れては行け

診療所の開所

ない。そこで、現地の腹心の者だけを伴い、米兵の監視をすり抜けるように現場に赴かざるを得なかったのである。

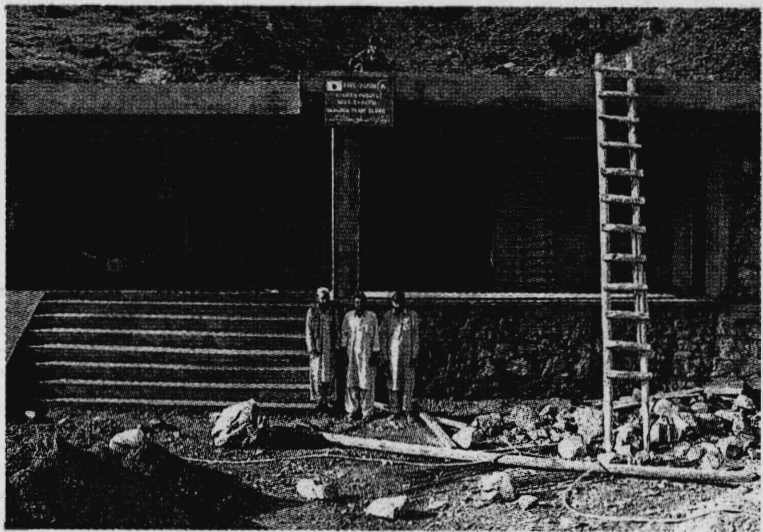
開所式には、ターバンを巻いた同地の長老会メンバー約三十人、PMS(ペンジャール会医療サービズ)診療所の職員十五人が列席し、厳かに行われた。新しく任命された郡長が武装兵とともに駆けつけ、さらににぎやかな式となった。

一九九一―九二年にかけて設立されたアフガン東部のPMS各診療所は、何事もなく運営されていた。山々も木々も、そつそつと流れる溪谷のせせらぎも変わらなかった。変わったのは、一部の村人の態度である。昨年の「アフガン復興・東京会議」の影響が影を落としていた。長老の一人が、賛辞を読み上げたが、まるで要望書ともとれるもの

で、「病院設備を充実し、ワクチン接種、女性診療員を送り、地域の医療センターとせよ、村の水力発電所からくる電気代は一月だけ免除する」というものだった。

これは実は、一部の者の発言だったが、以前には考えられなかったことである。長老たちの間にどよめきが起こり、「今そんなことを言わなくとも」と述べる者さえいる。座が白けかけたところを、郡長が制してしかりつけるように言った。

「わしは、権力を持つ一人の役人としてではなく、一人のパシトゥン人同郷者として言う。こんな田舎に、誰が診療所を開けたか。あの十二年前の戦乱のさなか、アフガン人の誰もが来なかったのだ。今でもそうだ。カブールから誰が来たか。バミヤンから誰が来たか。このジャパおられるのだ」



沖縄平和賞の賞金の一部を充て、アフガニスタンに完成した診療所「オキナワ・ピース・クリニック」=7月中旬

「一ニ一(日本人)が来ただけだ。私はかつて難民時代、外国人の土木公団で働いたことがある。その時、外国人の上司は決して現場に来ることはなかった。あいさつでさえ、服の上からするだけだった。だが、見よ。誰も寄りつかぬこの場所に、この院長自らが

ここでは勇気が何よりも徳である。彼に明確な反米意識や宗教意識があるわけではなかった。むしろ、反タリバン新政権下で、新秩序を立てる立場にあった。ここはやはりアフガニスタンなのだと思う。後で感謝を述べ、来年の総選挙のことを尋ねると、「個人的な意見ですが」と断って、述べた。

「ペンジャールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。

人々の生活壊し、欲望刺激した復興支援

「ペンジャールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。

「ペンジャールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。